

10月に入りましたが、日中の陽射しは強く、残暑と呼ぶには収まりきらない、何とも形容しがたい暑さを感じさせます。それでも朝晩には秋の冷気が訪れ、虫の音が静かに響く季節となりました。今号では、日々の研鑽を重ね、豊橋の文化発展に寄与された方々を称える「豊橋文化賞」「豊橋文化奨励賞」受賞者のインタビューを掲載しています。文化を志す人々にとって示唆に富むお言葉を数多くいただきました。ぜひ一読ください。

豊橋文化祭2025開会式典を開催しました。

令和7年度豊橋文化賞に中野貴康さん、豊橋文化奨励賞に北沢美白さんが選ばれ、表彰されました。

令和7年9月27日(土)、豊橋文化祭の幕開けを飾る開会式典が豊橋市公会堂にて開催されました。

式典は津軽三味線雅會による迫力ある演奏で幕を開け、続いて長坂尚登豊橋市長の開会宣言、伊藤晴康副理事長の挨拶がありました。その後、豊橋文化賞および豊橋文化奨励賞の表彰、地域文化振興活動功労賞や郷土文芸作品入選者の表彰が行われました。豊橋文化賞・豊橋文化奨励賞の受賞者からは、心に残る素晴らしい挨拶があり、会場は温かな拍手に包まれました。続いて、小原昌子豊橋市議会議長から祝辞がありました。

その後、豊橋吹奏楽団による記念公演が行われました。「マツケンサンバⅡ」や「サザンオールスターズメドレー」など多彩な楽曲が披露され、アンコールでは「情熱大陸」が演奏されました。多くの来場者が、華やかな音色に包まれたひとときを楽しみました。



豊橋文化賞、豊橋文化奨励賞 受賞者インタビュー

豊橋文化賞 中野貴康さん

(津軽三味線雅會 家元)
中野さんにお話を伺いました。

— 津軽三味線との出会いは？

実は昔、歌手になりたかったんです。いわゆるフォークソングですね。若い頃、ギター1本を持って東京に出ました。本当に無計画だったので、早々にあきらめて帰ろうかと思っていた時、以前の働いていた伊良湖ビューホテルで知り合ったバンドマンのリーダーを思い出し、電話したところ東京の音楽事務所を紹介してもらいました。

その後、オーディションなどを受けているうちに銀座のクラブの社長にバンドマンとして引き抜かれたのですが、その社長が民謡好きで、民謡酒場に連れて行ってもらったとき、津軽三味線奏者の五錦竜二先生に出会いました。

当時はまだ津軽三味線は今ほど知られておらず、私もそのとき初めて聴いたのですが、その迫力に衝撃を受けてしまい、完全に惚れ込んでしまいました。それまでの三味線のイメージといえば「ちんとんしゃん」だったので、本当に驚きました。その後すぐに弟子入りし、津軽三味線に本腰を入れて取り組むことを決めました。

— その後、豊橋で教室を開かれたのですね。

豊橋に戻ってからも東京に通って稽古を続けながら、自身の教室を開きました。今ほど知られた楽器ではなかったのですが、生徒集めには本当に苦労しました。最初の頃は津軽三味線を背負ってバイクに乗り、一軒ずつ訪ね歩きました。今ややっていたら怪しまれるかもしれませんが(笑)、当時はそれで少しずつ生徒が増えていきました。民謡ブームの追い風や、多くの良い出会いにも恵まれ、現在では豊橋・浜松・名古屋に約30の教室を構えるまでになりました。

— 生徒から多くのコンクール入賞者を輩出されています。指導で大切にしていることは？

大仰なことは何もないのですが、子どもを感情的に叱らないことだけはずっと守っています。津軽三味線が嫌いになってしまったら元も子もありませんから。ここに通った子どもの誰に聞いても、きっと誰も私のことを「怖い」とは言わないと思いますよ。顔は怖そうですが(笑)。

また、基礎はしっかり身に付けてほしいとも思っています。昔、著名な俳優が「教える極意は、学ぶ気にさせることだ」と言っていたのですが、まさにその通りだと思います。生徒が楽しく稽古に通えるように工夫しています。

— 作曲活動もされています。

津軽三味線の始祖・仁太坊の生涯を知ったとき、この人を称える曲を作りたいと思ったのがきっかけです。人にも恵まれ、プロのシンセサイザー奏者やアレンジャーの協力を得て、実現することができました。津軽三味線の奏者は3本の糸という制約から、ある時期に楽器の表現に限界を感じている時期があります。私の場合、そうした時期にライフワークとして作曲にも取り組みました。しかし、様々な楽器を知ると逆に津軽三味線ならではの魅力にも気がつくことになりました。力強い打撃音や、「サワリ」という独特の音響構造は、津軽三味線にしか出せない音色です。

— 三味線の皮も開発されたと同じました。

三味線の皮はもともと犬の皮です。以前は私のところでも犬皮を仕入れて加工していたんですよ。しかし今の子どもたちはそこ

に抵抗を感じる子も多いです。人工皮は昔からありましたが、当時は音がまったく響かず、やはり本皮でなければという意見も根強いんです。

でも常識を疑い、思い切って開発に踏み切りました。あらゆる素材を取り寄せて試し、様々な工場を訪ねて専用圧縮機の製造を依頼するなど試行錯誤の連続でした。その結果誕生した人工皮「風音(かざね)」は、今ではプロやセミプロなら知らない人がいないほどの認知度となり、全国から依頼も来るようになり主流になりました。知られざる豊橋発の商品です(笑)。

— 最後に、これからの目標や夢をお聞かせください。

もちろん次世代を担う子どもたちを育てたいという思いはありますが、今特に強く思っているのは、三味線という楽器そのものの姿を残したいということです。というのも、演奏する人も減り、三味線をつくる職人も高齢化し、製造会社や周辺の道具を扱う店も年々少なくなっており、演奏する人にとくる人、支える人たちのつながりが、少しずつ失われつつあります。

近い将来、楽器そのものが手に入らなくなるかもしれない——そんな危機感を持っています。三味線という楽器の姿がこれからも長く残っていくように、自分にできることを少しずつでも続けていきたいと思っています。

豊橋文化奨励賞 北沢美白さん

(面司 如意ノ坊 三世)
北沢さんにお話を伺いました。

— 幼少期から伝統文化に関心がありましたか？

私の父が世界史の教員でしたので、幼少期から自宅には歴史の書物や図録、美術書が溢れていました。父にとっては半分仕事でしたが、京都や奈良に旅行に連れられていけることも多かったんです。また祖母は能楽を嗜み、父方の祖母も茶人を目指した時期があったと聞いています。そうした環境でしたから、伝統文化は物心ついたときから身近であったと思います。

— 京都の大学に進学したのは幼少期からの影響でしょうか？

実はそこは少し違っていて、高校時代は陸上競技に打ち込んでおり、陸上の特待生として京都の大学に進学しました。当然、大学入学後も陸上に力を注ぎました。もっとも、中学と高校の美術の先生達から「君は芸術家になるよ」と予言めいたことを言われたことがあり、それは心の片隅に残っていました。でも陸上で大学進学したわけですし、芸術とは縁のない人生になるのかと感じていました。

それでも、陸上部のポスターは全部自分がデザインしていました。そして大学4年生のときに、一度チャレンジしてみようという1年の猶予期間をもらい創作活動に取り組みました。グラフィック作品を制作して銀座のギャラリーに出展したところ、ある方が私の作品で目を止め「君の探しているものがうちにあるかもしれないよ」と言っていかれたんです。その時はその方が誰なのか分かりませんでしたが、住所が京都だと分かり半年後に連絡を取り自宅を訪ねました。

京都のご自宅は工房になっていて、そこで初めて能面を見せていただき、強烈なイ

ンスプレーションが湧きました。自分の力を伸ばせる道、自分の人生のビジョンが見えた気がしたんです。特に先々代・北沢如意による舞台使用の能面を手にしたとき、「こんなにイケてるもんなんや」と思いました。——あまりに率直な感想ですが(笑)。自分の表現したいものが、すべてここにあると。

— その後、すぐ能面の道へ？

はい。少しやってみようという気持ちではなく、最初から「自分は能面師になる」と信じて取り組みました。今思えば若気の至りかもしれませんが(笑)。ただ、その後能面師として北沢流を継ぐという話になった際には、迷う気持ちがありました。背負うものが多すぎますから。個人作家として自由に活動したいという気持ちとの葛藤ですね。けれども先代から「能面を作り続けるなら北沢を名乗ってほしい。社会への貢献という意味でも名を継ぐべきだ」と言われました。

伝統の世界は作って終わりではありません。作ったものを長く保守していく責任があります。場合によっては一代で終わらない仕事もあります。能面もまた適切に保守され、長く使われることで価値が増していくのです。北沢流の作品であれば代々受け継いで保守されます。それはいわば品質保証であり、それこそが伝統文化の継承であり、社会貢献である。そのように考え、北沢を名乗れば当然厳しい目で見られることになるのですが、その事も含めて、使命感を持ち北沢流三世を名乗らせていただきました。

— 令和7年に安久美神戸神明社の鬼祭り新面更新がすべて終わりました。苦勞された点はどこでしたか？

この事業は平成28年にお話をいただき、調査や試作を経て令和元年から製作を始め、令和7年に完了しました。足掛け9年にわたる仕事です。その間、技術的な面もさることながら、やはり大変だったのは気の持ちようだったと思います。

能楽もルーツをたどれば神事や祭事であり、その根本には信仰があります。昔は仏像を作るのに人は命を賭けて取り組みました。しかし現代では、お祭りというどうしてもフェスティバル的な楽しめしめとしての感覚が強くあります。その意識の落差をどう埋めるかが大きな課題でした。

そこで食事制限、参籠潔斎といった行動を通して自分の気持ちを高めていくのですが、その過程で気がついたのは、かつて堅苦しいと感じていたお茶の作法や能楽の所作が、実は自分を高めるための方法論だったということです。所作は命懸けで取り組む姿勢を具体的な行動として示しているのだと気が付きました。堅苦しいと感じたのは実は“重い”という感覚で、重いのは当然のことだと思いました。

新面更新としての仕事は終わりましたが、もちろんこれで終わりではありません。完成した面を維持し、後世につなぐ責任が始まったにすぎません。私の代で終わらせるのではなく、きちんと後継者につないでいくことが大切だと考えています。

— これから先の将来の展望をお聞かせください。

これまで本当に多くの出会いに恵まれ、おかげ様で真摯な仕事をさせていただけました。特別に大きな夢があるわけではありません。初めて能面を手にして感動したときに見えたビジョンが、今も自分を導いています。そのビジョンに沿って仕事を続けたい。そして、本物をつくり続けたい——ただ、その思いだけです。

今号の一枚

TAKUTO

タイトル: コイと花のだるま (273mm×220mm) キャンバス、デジタル

だるまの中に、花やコイなどカラフルでちょっと毒がある、優しい絵を描きました。見ている人が元気になるような絵が得意です。

展覧会情報 「TAKUTO展—私の好きな世界—」 ◆日時/令和7年10月15日(水)～22日(水)10時～18時 ◆会場/アートエッジギャラリー (豊橋市向山西町3-2東海フレーム2F)



第67回邦楽大会を開催します。

今年の豊橋邦楽大会も昨年に引き続き、豊橋市公会堂、穂の国とよはし芸術劇場で開催します。ぜひご来場ください。

日本舞踊の部

▶開催日時/令和7年11月30日(日)午後0時30分開演 ▶会場/ 穂の国とよはし芸術劇場主ホール ▶入場料/ 2,000円 ▶出演団体(順不同) / 満帆会、藤美会、鯉廣会、清歌会、花柳芯喜依の会 ▶解説/ 成田家紫蝶

民謡・新舞踊の部

▶開催日時/令和7年12月6日(土)13時開演 ▶会場/ 豊橋市公会堂 ▶入場料/ 1,000円 ▶出演団体/ 清昇会、新舞踊紅豊会、日本民謡研究会、民謡むらさき会、静駒会、結月流元佳照会、浅香乃流美よし会、葵民舞研究会(出演順)

民謡・大正琴・三味線・太鼓・箏曲・長唄の部

▶開催日時/令和7年12月7日(日)午前10時30分開演 ▶会場/ 豊橋市公会堂 ▶入場料/ 1,000円 ▶出演団体/ 琴城流大正琴振興会豊橋支部、三河太鼓美友会、伊藤民謡会、みついと会、琴修会豊橋東、峰と海の会、つゆくさの会、絲結、奥田久子社中、箏曲加藤禧子社中、松の実会、箏曲みどり会、箏こでまり(出演順)



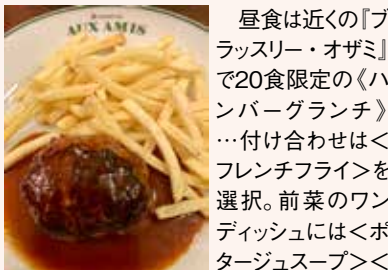
気まぐれ VOL.21

パチ旅

文化薫る町の美術館

斧路朱音

東京都大田区に仕事で三日間赴くことになった。せっかくなので前日に上京し、『三菱一号館美術館』で開催中の企画展「ルノワール×セザンヌ」を鑑賞することにした。オレンジリー美術館とオルセー美術館のコレクションから選抜され、日本に空輸された逸品たち…会場に一步足を踏み入れると、モダンを拓いた巨匠2人の寡作が、<静物画><風景画><人物画>と順を追って、ジャンルごとに比較展示されている。意図的に個性の違いを見せようという趣向だ。目に留まったセザンヌの《青い花瓶》(オルセー美術館蔵)をケイタイでパチリ。ルノワールの華やかで生気溢れる花々の表情とは対照的だが、抑制の効いた描写が好ましい。



昼食は近くの「ブラッスリー・オザミ」で20食限定の「ハンバーグランチ」…付け合わせはくフレンチフライを選択。前菜のワンディッシュにはくポタージュスープ<パスタ><マッシュポテト><厚焼き玉子>が載りバケットは、おかわり自由だ。

店を出て、日本橋のギャラリーを2軒ハシゴしたのち、京浜東北線に揺られて本来の目的地<JR大森駅>に着いた。西口で「馬込文士村散策のみち」を示す大きな看板(地図)を発見…閑静な住宅地となっている大田区山王、馬込、中央一帯(大森

駅から西側の地域)には、大正末期から昭和初期にかけ、多くの文士や芸術家が関東大震災後に移り住み、互いに親交を深めていた。そのため、この辺りが「馬込文士村」と呼ばれるようになったという。文士たちの記念館や居住跡案内板があり、彼らの足跡を訪ねることができる。一度ゆっくりと巡ってみたいと思うが、時間もないので『大田区立龍子記念館』をピンポイントで訪ねることにした。大正・昭和を代表し、近代日本画の巨匠と讃えられる川端龍子(かわばたりゅうし)の作品を収蔵・展示するタツノオトシゴを象ったような施設…龍子本人が喜寿を記念して自ら設計し、1962年に建立。会場芸術を標榜したスケールの大きな作品群は、観覧者を圧倒する。現在、記念館は大田区に引き継がれ、画家の志を継承している。



《煮込み(ゆで卵、豆腐入り)》をツマミに生ビールで喉を潤し、夕食は定番の『日高屋』で軽く済ませることにした。翌日から始まるハードな作業に備えて、早めに就寝。

仕事は順調に進み、最終日は時間に余裕ができたので、京浜東北線と地下鉄を乗り継ぎく清澄白河駅>で下車して『東京都現代美術館』を覗く…コレクション展示室では、開館30周年を記念して「9つのプロフィール1935～2025」が開かれていた。鶴岡政男の《重い手》(1949)をはじめ、中村宏<砂川五番>(1955)や高松次郎《扉の影》(1968)などそれぞれの時代を彩った名作が並ぶ。



＊「日本画壇に挑戦し続けた革命児—川端龍子展」が、11月3日まで『碧南市藤井達吉現代美術館』で開かれている。

